

夏花の向こうに

辻 憲男（文学部教授）

最近、詩が読まれない。時代が詩を求めないのか、言葉の力が衰えたのか。あるいはいつかまた、詩が復活して人の心をうつのだろうか。詩はいつも悲愴で不幸だった。孤高の詩人・伊東静雄の、

新妻にして見すべかりし／わがふるさとに／汝（なれ）を伴ひけふ来れば
／十歳（ととせ）を経たり
の言葉は重い。指さして言う、なつかしき山と河の名、走り出る吾子（あこ）に後（おく）れて、夏草の道を歩む「なれ」と「われ」。そこは結婚十年にして初めて帰った故郷、諫早である。長崎、雲仙、島原と見てまわり、師と約束していた原稿も書けなかった。十数年来、中学教師の生活に追われていた。昭和17年（1942）夏、日米開戦から半年、南洋の戦局は劣勢に転じつつあった。夏花の向こうにあるのは終末か、希望か。

28歳の時の作「わがひとに与ふる哀歌」は、

太陽は美しく輝き／あるひは太陽の美しく輝くことを希（ねが）ひ／手をかたくくみあはせ／しづかに私たちは歩いて行った／かく誘ふものの何であらうとも／私たちの内の／誘はるる清らかさを私は信ずると始まる。短い恋愛詩である。なぜか太陽は輝いてはいない。それでも「わがひと」＝恋人と私は、鳥や草木の讃歌を聴きながら歩いて行く。たとえ日光の中に「音なき空虚」が忍びこんでいようとも、湖のような厳粛な哀しみが満ちでいようとも。…詩の言葉に、神の啓示のような力がこもっている。



反正天皇陵のそばの借家は気に入っていた。
鳥やセミの声を詩につくった。堺市北三国ヶ丘。